

1975.8.29
日

核絶滅への私の期待

【京都】ヒロシマ・ナガサキから三十年。わが国で初めて開かれたバグウォッシュ・シンポジウム。開会式に車イスで出席し、基調演説を行った湯川秀樹博士の姿は、厳しい「平和の求道者」という鮮烈な印象を参加者やシンポジウムを見守る人たちに与えたようだ。二十九日は、前日に引き

バグウォッシュ シンポジウム

続き分科会のおと、昨年米國から返還された被爆後の広島・長崎の記録映画を参加者全員が観賞、科学者の立場から核兵器絶滅の道をたどる。この「京都シンポジウム」に何を期待するか。核問題に関心の強い三氏に話してもらった。

世界の科学者 一層の結集を



広島県原爆被害者団体協議会理事 田辺勝さん。私たちは原爆体験者として戦後一貫して「原爆はご免だ、あの悲惨な状態を繰り返してはならぬ」という悲願とともに生き続けてきました。しかし、アメリカを原爆とする超大国がある以上、核軍備に狂奔している

アジアのある べき姿討論を



川田侃(はしめ) 東大教授(国際関係論)。戦後三十年を経過、被爆国としての体験がやもする歴史の流れの中で風化しようとするとき、完全核軍縮を目指す京都シンポジウムの意義は大きい。イベントに変わるように核拡散の恐れや、米二大国が依然と

第三勢力から 参加増えれば



戦後わが国で初めて原子力平和利用を提唱した武谷三男・元立教大教授(物理学)。発足当時、米ソの緊迫した冷戦の中で有効な役割を果たしたこの会議も、六〇年代以降は二つの力で失ってしまっただろう。一つは米ソが急激に

して軍拡競争を行っているとき、完全軍縮がテーマの同シンポジウムの討論に期待します。バグウォッシュ会議の懇話委員会が広く世界に平和を訴えたことが契機となつて平和研究が盛んになったとい

う事実もあります。ポスト・ベトナムにおけるアジアのあるべき姿、特にアジア非武装地帯精神などをもう一度徹底的に討論していただき、恒久平和を望む日本の立場を貫いていただきたい。

c092-17-027